巻頭言

コロナ禍とテレビ会議

藤井　哲郎

技術が確立しても，なかなか世の中に使ってもらえない物が数多くある．私の関連する通信の分野では，テレビ電話及びテレビ会議がその代表格であった．何故過去形になるのかというと，このコロナ禍の中，突然，誰もがZoom，Skype，Webex，Teams等を使いだし，パソコンによるテレビ会議が当たり前になってしまったからだ．本学でも，2020年5月18日のオンライン授業開始以来，Zoomを中心にテレビ会議システムを用いてオンライン講義を開始した．誰もが一度は経験したであろうZoom飲み会など，全く想像もしなかった使い方までもが一気に普及した．全く筆者にとっては驚きである．コロナ禍に対して，技術の準備ができていて良かったとしか言いようが無い．

テレビ電話の開発は，1960年代から進められてきた．アメリカ最大の電話会社AT&Tのベル研究所が1964年のニューヨーク万国博覧会で展示したのが世界初であり，人気を博したそうである．ベル研究所は，ノーベル賞受賞者を20人以上排出した世界トップクラスの研究所である．当時，テレビ電話の開発は，豊富な資金力と世界一の技術力が無ければ挑戦できないテーマであった．その後，1970年にAT&Tがピッツバーグで世界初のテレビ電話の商用サービスを開始した．それ以来50年経つが，なかなか一般に振り向いてもらえなかった．国土が東西に広がるアメリカでは，テレビ会議システムがホテルを拠点に徐々に設置され，時差を伴う長時間移動を避けるために使われ始めた．しかし，日本では新幹線が張り巡らされ，テレビ会議よりも対面が好まれ，なかなかテレビ会議は普及しなかった．

テレビ電話に対する挑戦は日本で2度あった．1990年代中頃に，ISDNサービスの開始と共に，テレビ電話器が一般に一台10万円前後で発売開始された．筆者も，実家との連絡の為にペアで購入した．最初物珍しがって使っただけで，残念ながら埃をかぶるだけであった．2度目のチャンスは，2001年にサービスを開始した携帯電話FOMAの中にテレビ電話機能が組み込まれたときだ．誰でも手軽に携帯電話の一機能としてテレビ電話を使えるようになった．でも，使っているという人に出会ったことがなかった．

何故，テレビ電話を使わないかというと，顔を見られたくないと殆どの人が言う．相手の顔は見たいけれど，自分の顔は見せたくない．特に，女性は化粧無しでは映して欲しくないとのことである．そういえば，Zoomで授業を行うとき，帯域の関係から受講者はビデオをオンにしていない．一人，先生だけが顔を写して授業を行っており，若干虚しさを感じてしまう．そういえば，Zoomでゼミを行っていたとき，女子学生に「今日はスッピンなのでダメです」と言われたことを思い出す．

このコロナ禍が10年早かったらどうなっていたのであろうか．ノートパソコンの能力はテレビ会議には不足しており，こんなに普及することはなかったのであろうか．いや，受講者側は，10年前のパソコンでも大丈夫であったであろう．送信側の映像符号化を行う演算が非常に重く，専用のエンコーダと呼ばれる高価な装置がまだ必要であった．映像を送信するこの高価な専用装置を大量に購入し，当時の高速な配信サーバーに接続し，片方向のみの映像伝送を行う形式でオンライン授業を始めていただろう．まず，受講者の顔を見ることはできなかったはずだ．

現在の筆者の期待は，コロナ禍が去っても，テレビ電話＆テレビ会議が一般に根付くことである．コロナ禍が過ぎ去るとともにテレビ電話＆テレビ会議の利用が無くなってしまうことの無いように願っている．ちょうど，3D映像のブームが2010年前後に起き，3D衛星放送も盛んにおこなわれたが，今は全く皆無である．今や，誰も3D映像に興味を示さない．その様なことがテレビ電話＆テレビ会議に関して起きないことを期待している．

FUJII Tetsuro
東京都市大学メディア情報学部情報システム学科教授